

千潮海潮

泉石碧雲



第

壹

號

會 葉 二

次 目

天	火……青戸白虹	わが愛讀詩……白桔梗庵
干潮満潮……奥原碧雲	この布子……暮	潮
向日葵……安原西水	黄朽葉……小林吟月	
この親子……河井咀華	囁ぎの聲……後藤黙雷	
朝	寒……紫	山
花	野……藏田ふたば	紅炎短評……獨尊野人
眠れる稚兒……小林吟月	やまびこ……秋	花等
出雲路……右田紫水	消	息……會
寂	寥……福田紫雲	會
		告……

天 火

青 戸 白 虹

第 壹 號

渴きては餓はては地にひざまづき仰ぐに降る
みたましほほぞ
 聖靈白鳩
きよみざ
 聖き御座に讃嘆の歌たてまつるわれらは天の
あめ
 雲雀なるもの
たかね
 「傲り」は周く地に翼のして覺むる期なきを
あまね
 「悔い」は傷みぬ
いれ
 目醒めては詩の空高く羽ばたかめ靈眠りては
めざめ
 地に蠢動く
つち
うごめ
 幸や地の旅何の惚づるなく神讀するに足ら
さいはかち
 し孤獨
ひとりみ

千潮満潮

奥原碧雲

磯馴松風吹きしきる
海人が伏屋にうまれいで
あした夕を汐の音に
われは少童となりけり

わきて溢るゝ新汐の
うしはの香り慕ひては
眞珠白珠海の幸
龍の宮居のみあらかに

海の秘密をもらすとや
しこのあかぬひかさがしらに

大海神のねん怒り
浪のぬれぎぬかゝる身の

世にあえかなる乙姫の
ふかき情にすくはれて
千代に八千代にかはらじと
結びそめたるその赤繩

常世をしろす月讀の
神のみことの媒介に
みなぎる汐のさしひきや
實にも奇しき神たより

星は遷りて物かはり
浪は碎けてちりぬども

われらが戀は永久に
天地のむたきはみなく

満ちくる沙にひく沙に
時をたがへずうららかに
若き希望をたたえては
海底に磯邊にかよふなり

向日葵

安原西水

向日葵は西へめぐりて裏庭にゆふぐれせまる

ひよどりのこゑ

世をたれもひ世の人思ふれもひ寝の夢ねどろか

す芭蕉葉のかせ

夕の戸に消ゆる雁は見れくらじさらでも人

を思ひいづるに

この親子

河井咀華

何故阿母様は、彼處遠い所の、知らない叔父様の所へ行くんだらうか。
僕はどんなに淋しい所でも、矢張り此の村に居たくつて仕様がまいの
に。

僕の家は、阿母さんとたつた二人つきりなんで、何時でも静かで淋し
いけれど、ね隣の鈴ちゃん、毎日のやうに來て呉れるから、些つと
もつまらないことは無い。僕の家の前は、一面に廣い田圃で、四五丁行
くと、高い長い土堤がある。其の土堤には、春は土筆や、蓮華やなんか、澤
山生れて、秋になると奇麗な草花が一杯に咲くので、僕は非常に此處が
好きだ。學校から歸つて來ると、鈴ちゃん二人で、其處へ行つて、草花
をかき摘んで、花束が出來ると、今度はその土堤にある一里塚といつ
て、妙な格好の大きい松の樹のある所へ、其の花を飾つて、其處で一所に
唱歌を唱つて、ね祭り事をして、日の暮れるまで遊んだ。

鈴ちやんの家は、此の村でも一番大ききつて、そして立派な門もあるし、塀もある。丁度ね寺の様な赤瓦の家だから、僕の家なんかとは、丸で較べ物にならない。が、その鈴ちやんの阿母さんは、大變僕を可愛がつて下さつて、僕が鈴ちやんね遊びまど言つて誘ひに、行つた時に僕の頭を撫でよ、ね菓子だの、林檎だのを呉れる、

「鈴ちやんの阿母様にも、僕は阿母さんつて云ひたいわ。」

何時か僕が斯う云ふ、と鈴ちやんが、

「あゝ可いよ、妾の阿母様は眞郎のねッ母さん貴郎の阿母様は妾の阿母様、ね。」

と云つて居た。

僕の阿母様は、鈴ちやんの阿母様と仲好しで、平常往來をして、心安くしてゐらつしやる。何時だつたつて、僕が學校から歸つて見ると、鈴ちやんの阿母様が來てゐて、二人で何か話をしてゐらつしやつたが、僕の阿母様は涙をこぼして俯いて居らつしやる。僕は何故かしらと思議に思つて立つて居ると、鈴ちやんの阿母様は、僕を膝の上に乗せて、僕の

頭を撫でながら、之れもまた同じ様に泣き出された。

僕の阿父様は何うしたんだか、僕はまだ今年九つになるまで阿父様を知らない。僕にも鈴ちやんの様に阿父様が居て下さるといふけど、と思つて、何時も阿母様に、

「信の阿父様は何處に居らつしやるの、信よは何故阿父様がないのかしら、ね、ね、ね、母様」つて聞く。

「いままに阿父様の家へ連れて行つて上げるよ……」

といつては、またすぐ涙をこぼして居らつしやる。

僕の阿父様は矢張り鈴ちやんの阿父様の様にいゝ人なのかしら。此間車に乗つて來た時の怖い他所の小父様、あんな人は嫌や、散々阿母様をいぢめて泣かせた那麼小父様のやうざや無いたらうか。——僕が行つたら、信は大きくなつたつて、御褒美を下さるかしら、あゝ早く逢ひたいな、僕は阿父様が、信は何になるのつて聞くと、僕は日本一の大學者になつて、澤山お本をつくるんだつて云はうか、それとも學者なんか生地がないと仰有るだらうか、ね父様は強い軍人だつて阿母様が

何時か云つてらつしやつたから、僕も聞かれたら、軍人になるつて云はうかしら、そうだ、それがよからう、早く逢ひたいな。

僕がかう云ふと、阿母様は何故だかまた泣き出して、

「坊やはぬらいよ、どうかね、早く其處になつて阿母様に安心させてねくれよ」

といつてめそめそ泣いて居らつしやる。阿母様は弱いんだ、毎も泣くから仕方がない、なせそんなに悲しいのだらう。

今日も平常のやうに、鈴ちやんと學校から歸つて來ると、鈴ちやんの阿母様も、鈴ちやん所のね三も、それからふだん餘り來ないれ向うの小母さんも來てゐて、阿母様は彼方此方坐敷中をうろづいては、道具や着物やを有りつたけ出して、それをまた大きな行李に收めやうとして居らしやる。今朝までこわれてゐた頭髮も奇麗に結はれて、着物も例の無い。が、阿母様は僕の顔を見ると又悲しうに泣いて、襦袢の袖を噛んでゐらつしやる。

鈴ちやんの阿母様も、ね三も、れ向うの小母さんもみんな泣き出し

た。何の譯だか知らないが、僕も悲しくなつて泣いてゐると、阿母様は僕を惹き寄せて、

「明日はね、坊やの阿父様所へ行くんだから、もう此村には居ないのだよ……………」

僕は吃驚した、阿父様に逢ひたいのは山々だけれど、餘り事が急なので、矢張り阿父様には逢はないでも、鈴ちやんと何時までも仲よくして、此村に居たいやうな氣がする。其れが明日此家を立たなけりやならないと云ふので、一層悲しくつて、胸がつまつて、身体がふるへる様である。

「阿父様に逢ひたいのはあひたいけど、何故阿父様が此方へ歸つて來ないんでせう、僕と阿母様とか遠方へ行かなくなつたつて、阿父様か歸つて來て下さるといふのにね、さうすると鈴ちやんと何時までも遊ばれるし阿父様にも逢はれてよいのに……………」

といつて阿母様を見上げると、黙つて肯いたまふたれ泣きになる。阿母様も其の方かよかりさうなのに、それとも行きたいのかしら。

何だかまるで、夢の様で、僕はどうしても、此の家を出るのは厭な
つた。よく考へて見ると、もうく阿父様に逢はなくなつても、阿母様と
二人で、鈴ちゃんを遊ばせ、それでいゝと思ひ定めた。が、阿母様は矢張
り行かぬはならぬと仰有る。

それでは仕様がな、鈴ちゃんも暇乞をしやうといふので、僕は
暮方お泣きく、隣りへ行かうとして、何時も鈴ちゃんも遊んだ門の
前の黒柿の木の下まで行くと、鈴ちゃんも早や聞きつけて、僕の家へ來
やうと思つてた所だといふので、それから其木の根に立つたまゝ、

「鈴ちゃん何うしやうねね……」と僕が云ふと、

「信ちゃん、何故彼處へ行くの、妾ね、今家のれ父様たちの話して
居らつしやるのを聞いたわ、信ちゃんの阿母様は本當の阿父様の所へ
行くのぢやなくつてよ、……」

「おッ」と僕は驚いた。

「それや、どうして阿母様は其處事をするんだらうねね、」と僕が押
し返して聞くと、

「それはね、信ちゃんの阿母様は、他所の小父様——それ何時だつ
て車で來てゐたのね、あの信ちゃんが厭だつて云つたでせう、あの髯の
小父様のれ嫁様に行くのたつて」

「本當なの？」

と云つた僕は、もうく堪切れなくなつて、其儘泣き伏した。阿母様
は僕が可愛くは無いのたらうか、何故僕に嘘を云つたのかしら、と思
ふと何たか阿母様まで怖くなつた。鈴ちゃんも俯いたまゝ泣いてゐる。

僕が手は何時しか鈴ちゃんの手と結ばれて。
日はどつぷりと暮れて、あたりの暗かりに立つたまゝ泣いてゐる人
のあるのも知らなかつた。泣いて居る人は阿母様であつた、阿母様は矢
庭に走り寄つて、

「信ちゃん許してね呉れよ、ねね、何處へも行くのは止したから……」

「あら本當、ほんとに止して……」と僕も鈴ちゃんも聲をそろへて云
つた。

「あゝ止しますとも、だから二人は何時までも仲好くしてね、」

といつて涙を拭ひながら、小聲に、
「お、どうして行かれやう那麽人の家へ、此の儘死んでも、今夜死んで了つても信吉にまで可愛相な目を見せては……」
僕は此の言葉には氣がつかなかつた、行くのを止したと云はれたのが餘り嬉しくつて。

「いゝ阿母様ね鈴ちやんまた遊はれるよ」

月が今黒柿の枝に上つて、神々しい光りが三人をてらした。(をほり)

こは、氏が昨冬讀賣紙上に寄せしもの、請ふてこゝに轉載せり。

朝 寒

紫 山

くちばにさむくかぜふきて
あしにくだくるしもばしら
あけくれたぐるつるべなわ
とるてたゆたふけさなるよ

花 野

藏 田 ふ た ば

寂寥の地なる旅に君をえていまにぎはしき花野秋
やま

戀すべし涙あるべしうたふべしかくて天なる國は
まねかむ

またさらによき餌まゐりてかしづかむ哀歌にをし
き地のまれ人

ともすればわがもく道も疑ひてねほけな神にみ手
もまごひし

大御名にやがてそふ夜もありぬべし笑みてやるべ
き秋を別れ路

眠れる稚兒

小林吟月

小^{ちひさ}き魂^{たま}は日^ひねもすの
守^{もり}女^めが唄^{うた}につかれけむ
母^{はは}のみ胸^{むね}に抱^かかれて
眠^ねりの底^{そこ}にしづみゆく
枕^{まくら}をまもる燭^{そと}火^びの
薄^{うす}き火^ひ影^{かげ}にうかがへば
紅^{くわ}白^{はく}ふ頬^ほのあたり
かすかに浮^うぶ笑^{あは}みの波^{なみ}
春^{はる}あたくかき新^は潮^{しほ}の
みどりゆたけく寄^よするごと

霞^{はら}をもるくわけぼのく
花^{はな}やぐ光^{ひかり}さながらに

塵^{ちり}ひぢふかき人の世^よに
あるには清^{きよ}き身^みなればか
しばしは歸^{かへ}る神^{かみ}の膝^{ひざ}
いかに心^{こゝろ}もたらふらむ

あゝ星^{ほし}なせる眼^{まなこ}眸^しに
映^{うつ}るは清^{きよ}き天^{てん}の花^{はな}
もみぢ葉^はなせる小^{ちひ}き手^てに
すがるは愛^{あい}の神^{かみ}の袖^{そで}

あゝ美^{うつく}しきやはあしに
七^{なな}彩^{いろ}虹^{にじ}のはしわたる

神のかなづるしらべには
小き魂もをどるらむ

さむなをさな兒とこじへに

いづれのがれぬ人の世の

苦き夢路にまよふべき

運命はつらし汝がゆくて

出雲路 右田紫水

ゆふ暮のさひぬ遠山こむらさき笠よおちくる出雲ぢ
のたび

たまひつる詩のわつ衣かさぬれば秋風吹けとそでさ
むからず

寂寥

福田紫雲

いづれにか我世の光明もどめなむ美し戸こゝにま
た消ぬて去る

秋こゝに自然かたびし寂寥を露野うたひて人のほ
ゝ笑む

枯れし草に昔の花はしひざれな身は眞闇よりまや
みにはしる

果しらすこゝなる森に木精追ひてふたゝひかへる
道ももどめぬ

似ずもよしせめても意氣は慕へひと創負ひ小鹿の
まなざしの榮

わが愛讀詩

白桔梗庵

これわが愛讀詩なり、輿論は知らず。ただわが日々愛讀するものを記すのみ。讀まむ人、心し給へ

先づこゝに、品子女史の「みだれ髪」中にあるものよりはじめむ、女史は、新詩壇の明星、明治文壇の花形役者たるは、既に世の齊しく認むるところ、其詩や、濃艶豊美、加ふるに燃ゆるが如き情熱を以てし、詞藻爛、能く人をして眩せしむるに足る

經はにかし春のゆふべを奥の院の

二十五菩薩歌うけたまへ

われ、この詩を誦する毎に、青春燃ゆるが如き情熱を、珠數の手もて、かたく胸にねさへたる、眉目清秀の僧姿の、躍々として眼前に浮ぶを覺ゆ朦朧たる春月は、そが花やかなる光を、咲しみてる櫻花の上に投げて

、天や、地や、皆、美神の懷中甘き夢に酔へる時、身はひとり、鬼氣堂に滿てる奥の院に座し、一種悽愴なる音を帯べる看經の聲、さりとて燃ゆるが如き朱唇には、あまり冷かならずや、春のゆふべ、二十五菩薩、音調と情意と、兩ながらよく調和して、霞の底に湧きかへる、春の潮の如き聲をなす

たまくらに鬢のひとすぢされし音

を小琴と聞きし春の夜の夢

春宵のしばし、うたゝ寝の美人、芳魂夢に酔ふて、霞を分け、花を繞る、彼女が、亮々たる天樂と聞きしもの、知らずや、幾多思をこめたる、黒髪の一とすぢ、あやまりて手枕にされし、美妙の音なりしを、此詩織細、新月の如く、蛾眉に似たり。

繪日傘をかなたの岸の草になげわ

たる小川よ春の水ぬるさ

春興日は永くしてつきず、花を慕ふて丘をめぐり、霞を分けて水を渡る、驟す日傘には何の繪、襪される紅の裳、ゆるやかに春風に翻るを見る、暢達の調、和平なる春色を躍動せしむ

れどに立ちて小川をのぞむ乳母が

窓小雨のなかに山吹のちる

なづかしき人、なづかしき家、老いたる乳母があづかひ、幼かりし昔に異らず、深き愛情にうるめる老眼の中、いかに吾身の幸福を祈れるを見ずや、嗚呼彼の小川よ、昔なからのなづかしき音、思はず窓に走り寄れば、静かなる暮春の雨、はらはらと散る山吹の花、悉く追想の種なり、小川の音、乳母か窓、小雨にちる山吹、一塊となりて、無限の詩趣を惹く

鶯に朝寒からね京の山れち椿ふむ

人むつまじき

黃鳥嬌音を滑らして、春色漸く深からむとす、地は京の山、人は若きふたり、美しく路を埋めたる落椿をふみしたきて、啼々語りもくは何ぞ、見ずや幸福の笑みそが面に溢れたるを。

牛の子を小かげにたせ繪にうつ

す君がゆかたに柿の花ちる

清楚たる夏の朝、浴衣の講師、うつすは愛らしき牛の子、そが睡やかに優しからむ、そが柔毛よいかに美しからむ、畫は水彩畫なるべし、柿の花、清新の趣味を添ふること尠からず

この布子

暮

潮

かなしう来なく鶴鶴の

棺の霜のしろきかな

蝦夷が島根の北とはく

はやもみ雪のふるてふに

聲にこぼるる無花果の

この朝寒をこゝろせよ

占守はいとを水さひみ

君にぞおくるこの布子

黄 朽 葉

小林 吟 月

血潮もて野の草をむる世ならずや「義」はただ人の
夢のくりごと

彩羽たゞみ花にしはしを夢の蝶くはし少女が戀の
化現か

運命とやあさき人の智説くをやめよ世しらす神の
み旨は深し

いくたびか夢に歸りし故郷の田植小歌もむかしに
は似ぬ

わかき血の天ゆく雲をしたふ身も歸ればやすき詩
の美し里

囁ぎの聲

後 藤 黙 雷

余は、ある知人の病氣を見舞ふべく、午後八時すぎ自宅を出かけた。道
すがら彼の病苦を想ひやりつゝ、歩むともなく歩むだが、ふと氣が付い
て見れば、はや彼の家の前に来て居たのであつた。直ちに案内を請はう
かと思つたが、家内からは、身に沁み入る様な咳嗽の聲と、由ありげな
人の囁ぎ、余は、思はず歩を止めて、聞き入つたのである

「れ君や」乃父が病氣が全治るまで、萬望を休學でくれまいか。ね——
和女も随分涙憾だらうが……………」

「………」
「そりや和女いやたらう、かまかがよく考へて見な、これが他の病氣
なら兎も角も、輕くない眼の患ひ……………」若しこの儘、萬一乃父が什
麼かなつた日には、和女はどうするのたよ、それを願へや、今少し學校
を休んたつて……………」それでも厭なのかへ？」

「だつて阿父さん、妾休むことは………そんなら阿父さん、斯麼したらどうでせう、明日から、朝四時に起床て、五時までに御飯の用意を濟して、其脚で御藥戴きに行つて、歸つてから學校へ行つたら………午登にも阿父に御迷惑はかけませんから、ね阿父様？」

「オ、善く云つて呉れたがね、しかし年端も行かない和女を、未だ暗い四時に起し、一里からある遙堪くんだりへ、藥取りなどに………什麼してそんな可愛さうな目を見せられう、あゝ、何とした業病に取り當つたらう………」

障子越しに、漏れる二人の對話、我が眼の前へありくと見ゆるのは、病苦に蹙れた——かし何處となく人品の好い五十歳許の盲目の男、頭上白くける霜に、積年勞苦の跡は、明かに讀まれる。今一人は、此人の一人娘、これはまた愛らしい花の蕾、今年十三歳であるとか、優しい氣品のある丸顔は、數年前亡くなつた此の子が母親にそっくり、尙床しいことには、其心根の美しいことまでが似て——人生の不幸と艱苦とは残りなく味つて來て、其上今失明の重病に取りつかれて、恰も、茫々と

して際涯もない、砂漠の闇黒に放り出されたやうな彼の父親の心中に、一點の光明を投げるものは、實にこの優しいとはしの者であるのだ。——あゝ今二人は何麼してゐるのたらう、定めて、父親の見ゆるせぬ痛々しい眼からは、熱い涙がはらりと、瘦せ細つた手の甲にふりかゝるであらう。又少女が美しく艶々しい頬も、瀧なす涙に洗はれて、如何に淋しく青褪めて見ゆるたらう余は斯麼思ふと、一寸も此處に立つて居ることが出来ない。無我無心、つと這入るや否や

「そんなら、斯うしたら什麼たな、看病其他の用をするために、毎日半日づゝ休ませ、餘の半日を登校させて、教へて貰ふことにしたら、幸、先生にこれの知己があるから頼んで上げやう」
斯う云ふと、彼等父子は、不意を喰つて、少からず愕いたらしかたが、自分であるのを知つて、安心の色と感謝の意とは、彼等の罪のない顔に上つた。

「どうも毎々御親切に………どうかさうともなりませうば」
「いね決して御心配には及びませんよ………つい思ひ詰めて居たんだ

から、失禮しました、唐突に……」
「どう致しまして、其れのこと」
余は、彼等に約した

その後、彼女に逢ふごとに、莞爾やかに、美しい笑みを湛へて禮する。
そがふくよかな頬には、少からず安堵の色が見えて
(をばり)

短歌募集

投稿×切十二月二十二日

俳句募集

投稿×切十二月十八日

行く秋

藤村君子

ゆく秋をさこそさびしき歌もあらめ夢にも遠き八
潮路の人
歌の魂繪の魂こよひ手をとりにて萩の小雨にかたら
ひゆくよ

飯塚雲水
むらさきの桐の花びら散りかゝる小窓によりて琴
をとる君
たまはりし聖書一卷うれしさに秋の長夜をつくら
にしたしむ

神田如雲
朝寒の神立橋の上にして馬車にちひさき人を見れ
くる

雲まよふシベリアの空飛ぶ鷺のねごれる眼射どめ
すゝ人
朝ぼらげ八重の山々霧こめて筏を流すうたはるか
なり（立久恵に遊びしとき）

三 島 溪 雲

雨
朝寒を水くむ人のうしろ影いたくもさびし木犀の

笹舟に紅の花びらたかくつみて夕日に流す少女が
すさび
夏花のたかき香にかもとけ入りし小き魂のゆくへ
かなしも

秋 本 小 波

さくぐるに畏あらしか低き調詩しらせるは偉なる
神

たらちねも夢やすらかに臥しませる草の家めぐる
星しづかなり

小 野 月 草

わすれてはつく鐘の手をかざしつる雨の夕原霧う
つくしき

福 田 紫 雲

西空に神の名よびて諸手かざし詩の秀才をことほ
ぎまつる
さびしみはこの世さきの世ねそふべしさばわが詩
の神も消ひませ

うぶ聲は天にとどろき地にひびきやがて榮あるみ
珠といてん（みらしは「の發行を壽ぎて」）

「紅炎」短評

「紅炎」は去月十五日島根縣新報所載新涼會詠草なり

獨尊野人

◎松原無葉 君が歌は、どうもねいではない様だ、

水鳥の羽音か、しこき夢ふおけて、雨を催す富士川の秋、

が稍々見るべきものである、之とて餘り道具が多いから、頗る感興を殺ぐのである、作者は「かしこき夢」の一句を以て、崇高なる富嶽を髣髴せしめやうとの猜手段を出たのであらうか、此一句は、御氣の毒なから、全體の詩味を錯亂せ

いひるものである、又、木芙蓉に」

の歌の色々な小道具は、少しも貫之に縁がないものばかりだ「恨まむには、女々しくて生氣がない、

◎河野三星 「うつゝ兒」とは如何なるものに候や、吾輩不學謹んで御教示を仰ぎ候

◎中村秋泉「迷ひつれや」とは如何なる意味にや「迷ひつればにや」の意とすれば「はぐれては少しも分らず、又「雨の欄」の歌にて、よりし日と「み肩さびしき」とは、時が合はず、是非君に日本文典の熟讀を勸む

◎藏田二葉 いつもながら敬服

たのづから人にはこらむ賜物ぞ
靈はごくむに戀もうつくし

之を推して集中の白眉となす、秀氣一遺ぼとばしるを覺ゆ「よわきもの」の歌は陳腐、「撲てどのらしと貴人」れごりある頼語法怪し◎福田紫雲 「名をよびて男の子たゝむに島ぢちさき」駄法螺なるを免れず、「名をよびて」は強ひて銜へるもの、「なごか秋」分らぬ事甚し

◎河野翠瀾 君は一體に言葉をこなすことは旨いが、多く淺薄なるを免れぬ、「れのづから」の歌は妖怪譚の様だ、「くちなわ」なる語は

詩語として、餘りむさくらしいではあるまいか、「三とせこゝ」なる歌で、「立つや」のやの用法奇怪に感じられる

秋萩の鄙はさびしやこもり居に
そぞろ武藏の君が詩戀ふる
さすがに、情味の棄て難いところがあるやうだ君が詩戀ふるは小刀細工、今少しはらかにありたい

◎要するに新涼會の諸子は餘り新奇を銜ふ嫌がある、故に動々もすれば小細上に流れ、はては怪誕極まる言句を陳べて、得たりとなすに至るのである、諸子今にして戒

心せずんば、終に深く邪路に迷ひ入りて出づべからざるに至るてあらう妄批多罪(十一月十五日夜稿)

やまびこ

自壇弓)新涼會詩集第一篇として出づ、翠澈一派の短詩を収録せるもの也。總じて此派の詩人は今の時流の輕浮なるに似ず、着々として歩一步向上の途に就けるが如し。殊に著く目を惹けるは無業の進歩か、調よく整ひて想またへる望みて倦むなかるべし。翠澈は多能の作家、萬づ意に従はざるなき

。我が咀華に似たるものあり、しかもその短歌は新詩社の古き社友、またこの會の主幹、やがて翊を以て目せらるゝに拘らず、辭多く矯飾に富み銜耀に失し、極めて清興を傷ふものあり、さはあれ艶美豊麗は流石に子が獨壇、好詩人自愛せよ。二葉に至りては實に鷄群の小白鶴と云ふを得べく、詩、眞摯にして簡朴、心奥性靈の聲を現はして句々活動す。譬へば佐比賣山頭に佇立して、西海より吹き來る秋風を聴くが如し、賦れかはたみ^みさ^さけ^けか^か味^味にか^かさ^さこ^こし^し方^方た^たび^びて^て往^往に^にま^ませ^せし^し神^神余は祈る、天の靈火

かれを捉へて懷疑ふたゞび彼女を襲ふことなく、かの人生、かの自然をして、讚嘆渴仰の對象となさんことを。余は此等の諸詞友か第二の詩集を翹望すると共に、光榮ある未來の約束を空しうせざるべきを信せんと欲するもの也(秋花)「陽炎」(四號 岡山兒島町六九陽炎會)短詩には晶子、清亂、翠溪等新詩社派の作家を網羅し、醇茗の新体詩、萩舟の美文などをも收む。ねほむね再讀し値す。(秋花)

新派歌人の前身は、鸚鵡であつたとさ、だから見給へ、誰か一人羽

振りのよいものが一寸旨いことを云ふと、彼方でも此方でも、みんな其口眞似をする。よく泣くものは新派歌人である、戀のために生きてるものは新派歌人である、やがて日本を滅すのも新派歌人ではあるまいか。(以上二紅夢樓)概して、今日の詩人に足らぬものは自然の研究である、實に自然は、人の爲めには、教訓の無盡藏である、偉大なる活書である、この一大活書の一ページをも讀まないで、人詩顔するものがあるのが可笑しい、自然の教訓に學ばぬもの

は、詩人の價値がないと云つてもよろしいのである、請ふ詩人よ、多く野に行け、多く山に行け、多く海よゆけ、緑草けふる野べや白雲繞れる深山の中や、白砂青松の海のはどりや、そこに卿等が渴仰せる美神はいますのである。(金色夜刃)

消 息

雜誌「みちしほ」御發行計畫の由、
過般白虹氏より規則書頂載致し候へども、多忙且つ病氣、失禮致し候、快心の事業、生等は双手を揚げて賛成致し候、顧みて生等が當

年を想ふごとに、此の至難の事業の、美しき成功を祈るの念更に切に候、もとより兄等か御企圖の事、精々御覺悟も可有之候へども、願はくは、最も多く意ま致されむことを、小生過去の經驗に徴して老婆の心……一日も早く、我かなつかしき兄等のみ手によりて、美しき「みちしほ」か小生の机上に致されむことを、はるかに鶴首致し居り候
(咀華)

其後は如何御消光遊はされ候や、小生身体は、幸に恙なき方なるも、精神的に於ては、頗る枯渴殆んど詩味と信念とを缺ぎ、索然とし

て徒らに乾燥、今後大に修養を加へんと欲し居り候、……園藝的農家的の趣味を感じ、鶏でも飼養て見たしと思ふ、御一笑被下度候、
(中略) 雜誌の計畫は如何其後トント聞ゆるなし、若し愈々御出版ならば、小生も仲間に入られたさものなり、希望々々
(曉星)

文に忠なる會友諸君の同情によりて、わか「みちしほ」は呱呱の聲を上げ候、吾等は協力盡瘁只管此愛兒の健全なる發育を祈るべきに候、吾か地風土の美は自から藝術の熾盛を促して、由來詩人文士の出づること頻々踵を接し、隨て各自

歩調を異にし統一なく、獨自から高うして敢へて下らず、恰も群雄割據の光景を現出するに至り候、これ實に文運を進むる所以の現象にあらざるべく候、生等因て深く感ずる所あり、敢へて不肖を顧みず、こゝに統一の旗幟を翻したる次第に候、然りと雖、生等は決して文壇の覇者を以て自から任ずるものにはこれなく、唯々諸君と一致協力滔々たる吾か文壇の潮流を挽回し、互に歩調を齊うし、相携へて遠大なる理想の目標に向て進歩の行途に上らむとするものに候故に期する所は、銜耀にあらざ、

誇張にわらず、最も眞摯なる研究に候、由來輕佻浮薄の氣は吾か文界を風靡して、定見なく節操なく徒らに他を摸倣し、一時を糊塗するに汲々として、研鑽の重んずべきを忘れたる者多かりしは、生等の併せて以て浩嘆措く能はざりし所、今や機運漸く熟し、年來の宿志茲に始めて實行を見るに至りしは實に喜悅の情に堪へず候、これひとへに會友諸君の熱心なる贊助と偉大なる同情とよ因るもの、深く感謝奉り候。

生等の此事を起すや、最も注意に注意を加へたるものは、持久の方得候、今後諸氏の椽大なる筆によりて吾が紙上に一段の光彩を添ふべく候。

本號には、俳句の寄稿なかりしが、次號よりは、大に募集し、渡部毅兩氏に選を囑托すること致し候。本號は今暫く以前に發行すべかりしも、何分創業の際とて、諸般の設備調はず、荏苒今日に至り候、是深く諸君に謝する所、次號よりは出來得る限り速に、諸君の机上と致と所存に御座候敬具

(編輯子)

法に候、吾か地方曾て文學雜誌の起りしこと當に一再に止まらず、而して皆中途よして挫折し甚しきは第二號を見ずして倒れたるものこれあり候、生等仍て熟々其失敗の因て來る所を按ずるに、悉く會計上の齟齬に外ならず候、這回吾が會を會友組織としたるは、實に是に見る所ありしを以てに候、故に今後會計の整理は最も嚴密を旨と致すべく、就ては會費の御納附は必ず所定の規約に従はれむことを懇請仕り候、吾等は幸にして、河井咀華氏を始めとして、中央文壇なる吾地方出身文士諸氏の同情を

▲▲正誤——第十五頁「眠れる稚兒」第六節第二句は「わたる七彩虹のはし」の誤植●第十八頁「わが愛讀詩」第四行濃艶は濃艶の誤●第五行爛の上に絢字を脱したり●第十五行「咲しみる」は「咲さみる」の誤●第二十九頁末行「み珠といでん」は「み珠といでん」の誤●第三十二頁「やまびこ」第七行「想また」の下に適字を脱したり

物産土御詣參社大雲出

名家
物傳

高田屋羊羹

精製
上菓子類

出雲國杵築町大鳥居

高田屋事

前島與四郎

會告

○本會現在(十二月七日)會友人名左の如し

庵原大三郎 飯原大雲一 糸原賀塚仙一 小戸川文伸 小川乙八 小渡部權五 渡部弘毅 河田如咀 神門柳重 吉門重曉 吉寄美子 寄米真三 田山善治 田村斧三 山田紅治 中園村印あるものは編輯委員

中永村上野田林 村上原田田 藏與田井田 山藤岡田 藤岡田 福藤岡田 福藤岡田 後藤岡田 小寺吟默 寺吟默 赤信 寺吟默 青武 寺吟默 水白 寺吟默 三水白 寺吟默 安竹 寺吟默 森文 寺吟默 森文 寺吟默 森文 寺吟默 澄宗 寺吟默

(576は順)

●大勉強廣告●

各學校教科書一切

島根縣立第三

中學校門前

板倉書肆

内外一書籍諸雜誌取次

青戸白虹編

落穂集

(定價廿五錢)

文學雜誌 みちしほ發賣所

中學用品一式
並舶來雜貨一式
和漢文具一式
海軍帽子類色々

島根縣立第三中學校
本門前

荒木商店

歐米ノ雜貨和漢ノ文具殊ニ中學用品ハ
細大整備セサルナク嶄新ノ意匠精良ナ
ル物品ヲ撰ビ最モ低廉ナル價格ヲ以テ
購求ニ應スルハ弊店ノ聊カ自負スル所
ニシテ又以テ店頭常ニ顧客市ヲナシ好
評噴々タル所以ナリト信ス而シテ多々益辦スル
ノ覺悟ナレバ希クハ倍舊ノ愛顧ヲ賜ラン

御旅館

なばや

弊館創業以來茲に二百餘年幸に御双方の御引立に依りて今日に至り候ひしは有る難き仕合と存じ候豫々客室狹隘を告げ之も改築中の處落成致し候に付き十一月三日より座敷開き仕り候今後は一層御便利と御慰安とを圖るべく精々相働き候間倍舊の御愛顧を賜はり候様致し度懇請仕り候敬白

出雲國杵築

因幡屋

二葉會々則

みちしほ概則

- 一、本會は文學研究の同志(會友)を以て組織す
- 二、何人とも雖本會々友たることを得
- 三、會友は毎月五日以内に會費として金六錢づつ本會宛送附すべきものとす
但郵券代用を許す
遠隔地會友は別に雜誌郵送料を申し受くることあるべし
數月分を前納するを得
- 四、會友五名以上紹介したる者は特に會費を徴せず
- 五、本會は毎月一回(十五日)機關雜誌「みちしほ」を發行して會友に配布す
- 六、會友は短歌、美文、新詩、小説、俳句、評論等任意機關誌に投稿するを得
但取捨の權は編者に與へらるべし
- 七、會友外に於ても秀逸なる寄稿は大に歡迎す
- 八、原稿は書體明瞭に認め、一行二十二字詰、各篇用紙を異にせらるべし
- 九、未完の原稿又は文字乱雜なるものは没書す
- 一〇、投稿の切期日は前月末日とす
- 一一、會友は會の設備上一切に就て意見を述べることを得
- 一二、本會事務は會友中の數名を以て分擔す

發行日 毎月一回(十五日)發行
定價 一部金七錢、郵稅貳錢
但松江及び杵築の發賣所
にては郵稅を申し受けず

廣告料
一頁金四拾錢
二頁金六拾錢
六ヶ月金壹圓五拾錢
壹ヶ年金貳圓五拾錢

明治三十六年十二月八日印刷
明治三十六年十二月十六日發行

島根縣兼行所
編者 林吉太郎
編輯兼發行所 島根縣兼行所
二百四十五番邸
印 島根縣兼行所
島根縣兼行所
二百七十番地
印刷所 杵築第一活版所
發賣所 島根縣松江末次本町
發賣所 島根縣兼行所
發賣所 島根縣兼行所
發賣所 島根縣兼行所